

マスク

白鷗中学校 二年 細田 遥夏

今から約四年前、二〇一九年の十二月初旬、わずか数ヶ月ほどの間にパンデミックと言われる、世界的な流行となったコロナウイルス。それから老若男女に関わらず誰もがつけるようになったマスク。

私はみんなの笑顔が見たい。そう思ったのは、小学校の卒業アルバムを見ていた時だった。一年生の頃、二年、三年と順にページをめくっていた。四年生のページを見ると、どこどこにマスクをつけた私達の写真があった。でも、中にはマスクをつけていない男子達が歯を剥き出してニツコリと笑っている写真もあった。見ているこちら側にも、思わず笑みが溢れてしまった。だが、次のページを開いた瞬間、虚しさを感じた。そこには、見開きいっぱいマスクで覆われた私達の顔の写真が詰められていた。唯一集合写真だけは、みんなマスクを外して撮っていた。少しホッとした。あの頃を思い出すと、私達はマスク姿に慣れてしまっていた。マスクをつけていることが普通で、つけていないとおかしいと思ったり、素顔を見られるのが嫌で、恥ずかしいと感じている人もいた。だが、四年経った今でもどこかでそう感じている人もいるだろう。そんな不安を持たせてしまったマスクが私は嫌いだ。感染を防ぐためのマスクが、顔を隠すための物になってしまっているのではないか。

今年の運動会。その日は太陽が照りつけていて、とても暑い日だった。学校のアナウンスでも、「熱中症対策としてマスクは外しましょう。」と放送されていた。でも、私が見た中で外していた人は一部の人達だけだった。私も熱中症で倒れてしまうのは怖いと思い、「マスク外した方が良いよ。」と呼びかけた。それでも外せない子はいた。みんな楽しんで笑顔が見たかった。

目だけでは表情が見えない。友達と話している時も、「今相手は笑っているのかな。」「怒っているのかな。」と、いつも以上に相手に気をつかってしまっている事が多くなっている。会話は出来ているのに表情が見えないだけで、こんなにもコミュニケーションをとる事が難しいのだと感じた。

このコロナ禍、私達はマスクにとっても助けられてきたが、感染者が減ってきている今ではこのようなデメリットが出てきている。マスクの使い方が変わってしまったこの環境を、お互い顔を合わせあって話していたあの頃に少しでも戻したい。ならば、何年も続いてしまっているこの状況を自分達がまずは変えていかなければならない。現状では、マスクは常につけている物、つけている事が当たり前といった概念がつくられてしまっている。何故このよう

になってしまったのかと考えたところ、強制的なマスク着用の期間が長かったり、その事への呼びかけも激しかったからだと考えている。

では、この現状を変えるためにどのような取り組みを行うべきか。まずは、マスクを外せない人の気持ちに寄り添う事が大切だと思う。恥ずかしい、怖い、本当に外していいのか、など多くの不安がある。その人の気持ち一つ一つに合わせた取り組みを考えればいい。例えば、本当に外しているのか分からないという人に対して。きっとその人は外して良い時とだめな時の場合が分かりにくい状況であるからだと思う。このような不安を解決する一つの取り組みとして、どういった時は大丈夫なのか、あるいはこういう時は着用しなければならぬというのを区別する。その事をテレビ番組などで知らせるだけでなく、学校などでも呼びかけることで、少しでも不安が解けるのではないでしょうか。

マスク生活からリセットして、素敵な笑顔で溢れる生活を取り戻していきたい。